

り。走ること疾くして鳥の飛ぶが如し。三万国の狐直等の根本是れなり。

雷の意を得て子を生ましめ強き力在る縁 いかづち ちからしひ 第二 このもと

昔敏達天皇是れ磐余祇田宮に国食し淳名倉太玉數命なり^{（一）}の御世に、尾張國阿育知^{（二）}郡片絕里に、一の農夫有り。田を作り水を引く時に少細に雨降る。故に木^{（三）}の本に隠れ、金杖を操きて立つ。時に雷鳴る。すなはち恐り驚き、金杖を擎^{（四）}げて立つ。すなはち雷彼の人の前に墮つ。雷小子になりて随ひ伏す。其の入金^{（五）}杖を持ちて撞かむとする時に、雷言はく「我れを害すことなかれ。我れ汝の恩を報いむ」といふ。其の人間ひて言はく「汝何に報いむ」といふ。雷答へて言はく「汝に寄りて子を貽ましめて報いむ。故に我が為に桶の船を作りて水を入れ、竹の葉を泛て賜へ」といふ。すなはち雷の言の如く作り備へて与ふ。

「来て咲き」だから「きつね」といふ。語源說話。本行かた割注にも類縁する形式は中国にも、まづ日本の上代にも類縁がある（石塚晴道）。本書では、歌謡を記す箇所にとこの形式のみみられる。二底本訓釈欄（須賀）。狐の化した女が「紅装」を着ていた例は紀綱所収の斬首官の說話（云記四五〇）や江渡清の氏名伝などにみえる。三底本のうすしかにあるまう。底本訓釈（發榮上音要反下音調反、二合、佐輔）。「いぬ」の表記を二底本と變化させている。五去る者を削ぶ。一部のイヌイジは中巻二綴に縮ひてゐる。万葉集十一・三三説、十二・三三に「彫影にわが身はかぬたまたまきける鹿のかに見えていにしきゆゑ」にとみえる。本説語のはろかにには上文的の曠野に対応する表現。そこでここでは人名一起換説語となつてゐる。七末詳。同名一族が実在しないならば、この説語の理趣は減算する。八狐が強力イヌイジと結びつくのは珍しい。

第三緣 雷より授かつた子の説話。郁良香の道場法師伝(本朝文粹・十二)は本書に載るが、十上縁、中巻二、中巻四縁、中巻一と並び、みえろ。

もとより。底本訓釈「意々我去云々」備へ。
二奈良東坂井市大字飛重あたりに所在。底本訓釈記最二合、平佐也。二底本訓釈(食国_ニ合、久爾乎数)。三底本訓釈淳治治出によれば阿育王寺の名なり表記は阿育王の名より借用。底本訓釈「總_レ和」。二總をヲとよむ現象は不明。一底本訓釈隆長_ニ合、多弥入留乎大明」。二少量の雨の降る状態をあらわす。底本訓釈(久類_ニ合、古佐也)以下、五三頁へ続く。

作る。時に其の寺の鍾堂の童子、夜別に死ぬ。彼の童子見て、衆の僧に白して言さく「我れ此の鬼を捉りて殺し、謹めて此の死の災を止めむ」とまうす。衆の僧聽許す。童子鍾堂の四の角に四の燈を置き、四人を備けて言ひ教ふらく「我れ鬼を捉る時に、俱燈の覆蓋を開け」とをしふ。然うして鍾堂の戸の本に居る。大鬼半夜所に来る。童子を付きて捉て退く。鬼また後夜の時に来り入る。すなはち鬼の頭の髪を捉りて別に引く。鬼は外に引き、童子は内に引く。彼の儲けたる四人慌迷ひて蓋を開くこと得ず。童子四の角別に鬼を引き依り、燈の蓋を開く。晨朝の時に至り、鬼已に頭の髪を引き剣かれて逃く。明日彼の鬼の血を尋ねて求め往き、其の寺の悪しき奴を埋み立てし衢に至る。すなはち彼の悪しき奴の霊鬼なりと知る。彼の鬼の頭の髪は、今に元興寺に在りて財と為る。然うして後に其の童子優婆塞に作り、なほ元興寺に住む。其の寺に田を作り水を引く。諸の王等妨げて水を入れたまはず。田焼くる時に、優婆塞言はく「吾れ田に水を引かむ」といふ。衆の僧聽す。故に十余人して荷つべき鋤柄を作り、すなはち持つ。優婆塞彼の鋤柄を持ちて杖に撞きて往き、水門の口に立てて居る。諸の王等鋤柄を引き棄てたまひて、水門の口を塞ぎて寺の田に入れたまはず。優婆塞また百余人して引く石を取り、水門を塞ぎ、寺の田に入

る。王等優婆塞の力を恐りて終に犯したまはず。故に寺の田渴れずして能く得たり。故に寺の衆の僧聽して得度出家せしめ、名けて道場法師と号ふ。後の世の人伝へて「元興寺の道場法師強き力多有り」と謂ふは是れなり。当に知るべし、誠に先の世に強く能き縁を修めて感る所の力なり、と。是れ日本国の奇しき事なり。

聖德太子異しき表を示す縁 第四

聖德皇太子は、磐余池辺双櫛宮に宇御めたまひし橘豊日天皇の子なり。小墾田宮に宇御めたまひし天皇の代に、立ちて皇太子に爲りたまふ。太子三の名有す。一の号は厩戸豊聡耳と曰す。二の号は聖德と曰す。三の号は上宮と曰す。厩の戸にして産れたまふ。故に厩戸と曰す。天年生れながら知れたまひて、十八一時に訟へ白す状を一言漏したまはず能く聞きて別きたまふ。故に豊聡耳と曰す。進止威儀、僧の似くして行ひたまひ、しかのみならず勝鬘法花の等き経の疏を製りたまひて法を弘め物を利け、考績功勳の階を定めたまふ。故に聖德と曰す。天皇の宮より上殿に住みたまふ。故に上宮皇と曰す。

訓釈は便令也と誤る。二五本説話にみる石はじつは本義經の一部分を構成してゐた石であり、それが現在いわゆる弥勒石として残存してゐる。とする相田泰は、さらに弥勒石所在地の付近の小字名「道場」よりそのあたりに元興寺にかかわる寺院建築の存在を推定し、「道場」の名はそれに拠つた、とする。二五子略感言釋「而生、的阿好真(彌衡)といつた伝承と共通する考えがええる。二五日本の前生説話では、過去世においていかになる行為がなされたのか、といったことは記述されないが、がふつう。「彌衡能縁」の具体相は示されてい

二鍾は「鍾」と同じ意に用いることがある。本書はその例。二底本訓釈(源字か)蓋不下文にもみえ、中巻二十丁縁の條にも同じくせがある。〇深夜、半夜、晨朝、とスト一リが展開する。本文中の「半夜」(深夜「晨朝は、いずれも時刻を示す語であらう。二鍾堂を舞台としてこのなスト一リ展開が、みられるのは、朝時のために鐘が撞かれたことにかかわる。一日を六時とし、日没、初夜、中夜、後夜、晨朝、日中、とすることがあるが、ここにいう半夜は、中夜にあたるか。二底本訓釈(行々乃智支天)。鬼と燈とのむすびつきに關しては、鬼が堂内の智城に「我來看守(守言)と言つた例が觀高僧傳・十九にみえる。六童子が鬼の頭髪をひき剣がすイメーじは、中巻三縁の母が子の髪をつかみとどめたるイメーじや下巻三縁の觀音の手にかけた鋼を引いて垢闕するイメーじに結びつてゐる。底本訓釈(刻々波介太二)。七疫病で死んだ奴が、へ地中に埋め、その上を多くの人が踏み行くことによつて、悪氣をおさへこむのであらう。二〇「鬼は、中国ではまづ死者を意味した。日本においても鬼に頭を見ようとしたが、鬼なことなので宝書より選び出せなかつた、と扶桑略記二十八にみえる。故証には元興寺、今續顯此鬼妻ことある。二五取を受けた男子の在俗信者、七衆のひとつ。寺院の難務をおこなうはあが多い。三底本訓釈(何々主都)。二鍾の柄。底本訓釈(教々)柄(加良)。二原文「便」。底本

第四縁 延暦六年原撰本の日本国現報善惡異記では、本説話が冒頭に位置してゐたと推定される。原撰本は、日本仏教史を聖德太子を起点として叙述する、という方法の嚆矢である。日本往生極楽記、本朝法華驗記、今昔物語集本朝仏法節、へと継承された方法である。あやしき妻(二)の説話。二「聖德」シヤフナトク(私記云「昔説」(頼日本紀・十八)。山口佳紀によれば、この時代にはまだ「厩戸」豊聡耳皇子と、仍餘撰政、明天皇。三推古天皇。夏四月庚午朔己卯、元奈良泉校井市に所在。底本訓釈(卷二合伊波幡(れか)乃「又(續々奈良川支乃)」。三〇用立、厩戸豊聡耳皇子と、仍餘撰政、以乃機委委(日本書紀推古天皇元年冬)。三「生知者(續々僧云・一傳也)。三底本訓釈(卷止之)。三勝鬘經義疏、一巻。上宮聖德法王帝説は、推古天皇六年(五八三)の勝鬘經講經を述べて其儀如僧也とする。三法華義疏、四巻。三底本訓釈は制作

得¹雷之意令¹生子強力在緣第三

昔敏達天皇是譽余詔語田宮食²、國²名食²天皇歟命也御世、尾張國阿育知郡片絕里、有一農夫、作³田引³水之時、少細降³雨、故隱³木本、操³金杖而立、時雷鳴、即恐驚、擊³金杖而立、即雷墮³於彼人前、雷成³小子而隨伏、其人持³金杖將³擲時、雷言莫害³我、々報³汝之恩、其人問言、汝何報、雷答之言、寄於汝令³胎子而報、故為我作³楠船入³水、泛³竹葉而賜、即如³雷言、作備而与、時雷言莫近³依、令³遠避、即霧霧登³天、然後所³產兒之頭、纏³蛇二遍、首尾垂³後而生、長大年十有余頃、聞³之朝廷有³力人、念³試之、來於大宮邊居、爾時有³王力秀、當時住³大宮東北角之於別院、彼東北角、有³方八尺石、其力王自³住處出、取其石而投、即入³住處、閉門、他人不³令³出入、小子損念、名聞力人者是也、夜不³見人、取³其石而投、益³一尺、力王見之、手拍擲、取³石而投、從³常不³得³投益、小子亦二尺投益、王見³之希³亦投、猶不³得³益、小子立投石處、小子之跡、深三寸踐入、其石亦三尺投益、王見³跡念、是居³小子之投³石也、將³捉而依、即小子逃、王追³小子、通³牆而逃、王踰³牆上而追、小子亦返、俄而逃走、力王終不³得³捉、念自³我益³力小子、更不³追、然後小子、作³於元興寺之童子、時其寺鍾堂童子、夜別死、彼童子見、白³衆僧言、我捉³此鬼、殺、謹止³此死災、衆僧聽許、童子鍾堂之四角置³四燈、儲³四人言教、我捉³鬼時、俱開³燈蓋、然於鍾堂戶本居、大鬼半夜所來、佇³童子、而視之退、鬼亦後夜時來入、即捉³鬼頭髮而別引、鬼者外引、童子內引、彼儲四人慌迷、蓋不³得³開、童子四角別引鬼而依、開

燈蓋、至于晨朝時、鬼已頭髮所³引剝而逃、明日尋³彼鬼血而求往、至³於其寺惡奴埋立衢、即知³彼惡奴之靈鬼也、彼鬼之頭髮者、今在³元興寺為³財也、然後其童子、作³優婆塞、猶住³元興寺、其寺作³田引³水、諸王等妨不³入³水、田燒之時、優婆塞言、吾引³田水、衆僧聽之、故十余人可³荷作³鋤柄、便持之也、優婆塞持³彼鋤柄、撞杖而往、立³水門口而居、諸王等、鋤柄引³寒、塞³水門口、而不³入³寺田、優婆塞亦取³百余人引石、塞³於水門、入³於寺田、王等恐³平優婆塞之力、而終不³犯、故寺田不³渴、而能得³之、故寺衆僧、聰令³得度出家、名号³道場法師、後世人伝謂³元興寺道場法師強力多有³是也、当³知³、誠先世強修³能緣³所感之力也、是日本國奇事矣、

聖德皇太子示³異表³緣第四

聖德皇太子者、磐余池辺³欽官御³、字橘豐日天皇之子也、小墾田宮御³字天皇代、立³之為皇太子、々々有三名、一号曰³厩戶豐聰耳、二号曰³聖德、三号曰³上宮也、向³厩戶、産、故曰³厩戶、天年生知、十八一時訟白³之狀、一言不³漏、能聞³之別、故曰³豐聰耳、進止威儀、似³僧而行、加以製勝鬘花等経疏、弘³法利物、定³考績功勳之階、故曰³聖德、從³天皇宮住³上殿、故曰³上宮皇也、皇太子居³住于鰐岡本宮二時、有³緣出³宮、遊觀幸行、片岡村之路側、有³乞³人、得³病而臥、太子見³之、從³轡下、俱語之問訊、脫³所著衣、覆³於病人、而幸行也、遊觀既訖、返轡幸行、脫³覆之衣、挂³于木枝、無³彼乞³人、太子取³衣著³之、

1 雷(國)電
2 夢(與秋)仲
3 玉(國)王
4 絕(與秋)絶和(一)フメイ
5 引(國)ナシ
6 雷(國)電
7 雷(國)電
8 雷(國)ナシ
9 雷(國)ナシ
10 雷(國)ナシ
11 雷(國)電
12 雷(國)電
13 雷(國)電
14 雷(國)電
15 雷(國)電
16 雷(國)電
17 雷(國)電
18 雷(國)電
19 雷(國)電
20 雷(國)電
21 雷(國)電
22 雷(國)電
23 雷(國)電
24 雷(國)電
25 雷(國)電
26 雷(國)電
27 雷(國)電
28 雷(國)電
29 雷(國)電
30 雷(國)電
31 雷(國)電
32 雷(國)電
33 雷(國)電
34 雷(國)電
35 雷(國)電
36 雷(國)電
37 雷(國)電
38 雷(國)電
39 雷(國)電
40 雷(國)電
41 雷(國)電
42 雷(國)電
43 雷(國)電
44 雷(國)電
45 雷(國)電
46 雷(國)電
47 雷(國)電
48 雷(國)電
49 雷(國)電
50 雷(國)電
51 雷(國)電
52 雷(國)電
53 雷(國)電
54 雷(國)電
55 雷(國)電
56 雷(國)電
57 雷(國)電

1 代伐 2 子(國)ナシ
3 日(國)ナシ
4 以(國)ナシ
5 以(國)ナシ
6 豐(國)ナシ
7 考(國)ナシ
8 考(國)ナシ
9 殿(國)ナシ
10 崗(國)ナシ
11 乞(國)ナシ
12 乞(國)ナシ
13 乞(國)ナシ
14 乞(國)ナシ
15 乞(國)ナシ
16 乞(國)ナシ
17 乞(國)ナシ
18 乞(國)ナシ
19 乞(國)ナシ
20 乞(國)ナシ
21 乞(國)ナシ
22 乞(國)ナシ
23 乞(國)ナシ
24 乞(國)ナシ
25 乞(國)ナシ
26 乞(國)ナシ
27 乞(國)ナシ
28 乞(國)ナシ
29 乞(國)ナシ
30 乞(國)ナシ
31 乞(國)ナシ
32 乞(國)ナシ
33 乞(國)ナシ
34 乞(國)ナシ
35 乞(國)ナシ
36 乞(國)ナシ
37 乞(國)ナシ
38 乞(國)ナシ
39 乞(國)ナシ
40 乞(國)ナシ
41 乞(國)ナシ
42 乞(國)ナシ
43 乞(國)ナシ
44 乞(國)ナシ
45 乞(國)ナシ
46 乞(國)ナシ
47 乞(國)ナシ
48 乞(國)ナシ
49 乞(國)ナシ
50 乞(國)ナシ
51 乞(國)ナシ
52 乞(國)ナシ
53 乞(國)ナシ
54 乞(國)ナシ
55 乞(國)ナシ
56 乞(國)ナシ
57 乞(國)ナシ